



Title	はじめに : ベトナムにおける栄養と食の安全
Author(s)	住村, 欣範
Citation	GLOCOLブックレット. 2011, 5, p. 3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48292
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

はじめに：ベトナムにおける栄養と食の安全

住村 欣範 大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授

このブックレットは、2007年から2011年にかけてGLOCOLで行われてきた、ベトナムにおける栄養と食の安全に関する取り組みをまとめたものである。

表題にあるように、この冊子の内容は「栄養」と「食の安全」の二つの内容が含まれている。この二つの問題は、本来、互いに切っても切れない関係にある。特に近年、生活習慣病、老化と栄養、機能性食品といったテーマがクローズアップされる状況の中で、「栄養」と「食の安全」は、次第に、表裏一体の問題としてたちあられつつある。

しかし、このブックレットでは二つの問題の絡み合い、重なり合いを明確にするために、これまでの取り組みをあえて、「栄養編」と「食の安全編」の二つに分けて収録した。

食の問題を扱う場合、「栄養」と「安全(セーフティ)」に加えて、市場経済との関係および食料確保の問題を踏まえた農業的視点、さらに、食物の汚染の一因となる環境的視点が不可欠である。これは、ベトナムに限らず、広く、近代におけるいずれの社会にも共通する問題である。この冊子に収録された文章には、これらの側面について言及されたものも含まれている。以下、収録されている報告について若干の解説を行いたい。

「ベトナムの栄養政策について」

著者のトゥ・ザイ教授は、軍医で最終階級は大佐であり、1980年に創設された国立栄養院の設立者で初代院長でもある。2009年に他界されたが、その後、長男で現ベトナム栄養学会書記のトゥ・グウ氏が『医師トゥ・ザイ』という遺稿集を編集して2010年9月に発行した。筆者がトゥ・グウ氏の許可を得て、遺稿集に収録された論文「ベトナムの栄養政策について」を翻訳し、こ

の冊子に収録したものである。本編の初出は『応用栄養学』(2000年)となっているが、内容的には1980年代後半の視点から書かれている。トゥ・グウ氏に問い合わせたところ、ドイモイ(刷新政策)直後の1986年に書かれたものということが分かった。

トゥ・ザイ教授は、独立後のベトナムにおける栄養学と食に関する政策の基礎を作った人物であると言っていい。トゥ・ザイ教授の編集によって、ベトナム戦争中から発行された新聞「楽しく生きる(原題:vui sống)」は、多くの人々にとって健康に関する貴重な情報源であった。20世紀後半のベトナムにおける「健康と栄養」を社会的な側面から考察する上でも重要な資料である。

トゥ・ザイ教授には、ベトナムにおける栄養学の創設者、「楽しく生きる」の編者に加えて、もう一つ重要な業績がある。VACという概念を作り出し、政策の中に組み入れていった立役者であるという面である。

トゥ・ザイ教授の言葉によればVACは生態システムであり、V＝菜園(vườn)、A＝池(ao)、C＝畜舎(chuồng)の三つの要素の複合である。VACには、このほかに、VAC複合農業、VAC循環農法などの呼び方があり、その場合、農業生産の側面や資源循環の側面が強調される。しかし、トゥ・ザイ教授がVAC生態システムという概念を用いる場合、まず第一に念頭においてるのは、バランスの取れた栄養源となる多様な食品の供給源としての環境であり、さらには、文化や教育の場としての環境のニュアンスも含意されている。

この報告は、ドイモイ開始までの栄養政策がコンパクトにまとめられているだけでなく、「VAC生態システム」のほかにも、「集団経済」と対置される「家族経済」や、「地産地消」の究極版である「自産自消」、あるいは「食育」に似た考え方の萌芽が見られて大変興味深い。

このブックレットの他の報告で言及されている実践活動の多くも、トゥ・ザイ教授が考案し推進した栄養政策や施策に発想を得ている。

「ニンビン省フーロック行政村*」における母子の栄養状態と影響要因」

共著者のチン・ホン・ソンは、ベトナム国立栄養院・栄養コミュニケーションセンターの副センター長であり、ベトナムの栄養問

* このブックレット内で使われる「行政村」は、ベトナム語の末端行政単位であるxã(漢字の「社」に相当)に対応する概念である。これに対して「村」は「行政村」よりは下位の社会単位であり、ベトナム語のthônに相当する。

題に関する疫学的研究とコミュニケーション事業に従事している実践的研究者である。

この報告は、GLOCOL共同研究「ベトナムにおける家庭果菜園を利用した栄養ケアとフードセキュリティのモデル構築のための共同研究」(2008年-2009年)において、2008年度にハノイから南に70kmほどのところにある山地の農村部で行った調査の結果であり、2009年11月に行われたGLOCOLセミナー「ベトナムにおける『人口の質』と栄養—タイビンとニンビンの取り組みから—」における発表「ニンビン省の小中学校における『食育』の応用実践に向けて」の内容の一部に加筆したものである。

トゥ・ザイ教授の「ベトナムの栄養政策について」で繰り返し強調されていた母子の健康—栄養の問題の現代の状況を見ることができる。特に、急速に発展する大都市部とは対照的に、経済的に遅れた地域である山地の状況を綿密に調査したものとして貴重である。

「ベトナムにおける高齢化と栄養——タイビン省での取り組みから」

共著者のファム・ゴック・カイは、タイビン医科大学副学長で、同大学の栄養・食品安全衛生講座主任、科学管理責任者である。同大学には、ベトナム初の栄養・食品安全に関する大学院コースが設置されることになっており、ファム・ゴック・カイ副学長は、この分野において、ベトナムをリードする研究者であると言ってよい。

この報告は、2009年11月に行われたGLOCOLセミナー「ベトナムにおける『人口の質』と栄養—タイビンとニンビンの取り組みから—」における発表「家庭菜園を利用した農村部高齢者の栄養ケアの実践とモデル構築事業」の内容の一部に加筆したものである。先のニンビンの事例が「栄養学」の創成当時から関心を持たれていた「母子栄養」の問題に関するものであるのとは対照的に、高齢化という新しい問題を背景として行われた事業についての報告である。

タイビン医科大学は、高齢者を対象とした事業を2005年から行っていたが、高齢化をテーマとした事業としてはベトナムでは先駆的な例であった。この報告で言及される事業は、タイビン医科大学が行っていた事業に、屋敷地内の菜園の利用という新

しい要素と、老人会という新しい実施主体を盛り込んで刷新したものである。2008年度から開始された事業に関しては、味の素「食と健康」国際協力支援プログラムの助成を受けて実施され、2011年3月に終了した。

「ベトナムにおける水産物の流通の現状」

著者の李俊遠は、大阪大学 GLOCOL の非常勤特任研究員であり、GLOCOL が中心になって行っている科学研究費補助金基盤研究 A「フードセキュリティの人類学的研究」に参加している。これまで、長くベトナムの市場および水産業について、現地調査を踏まえて、特に資本主義化の観点から研究を行ってきた人類学者である。

2010 年、ハノイではキノコ鍋が大流行した。ハノイで食べられるキノコといえばシイタケが主であった。山地で採れる珍しいキノコが流行ったことは、交通網の整備によって流通が良くなり、遠隔地からも食材の調達が可能になったこと、そして、それと並行して人々の食の嗜好性が広がったことを示す一例であるが、海産物もこれと似たような性格を持つ。

李俊遠の報告は、急速な経済発展とグローバルな世界への編入の過程で変わりつつあるベトナムの水産業の生産・流通・消費の一端を垣間見せていて興味深い。

「ベトナムにおける食品安全衛生の現状」

著者のグエン・コン・カンは、前国立栄養院院長、現食品安全管理局局長である。この報告は、2010 年 10 月に行われた GLOCOL セミナー「ベトナムにおける食品安全衛生と専門家育成」での発表をもとに加筆したものである。

近代化と開放政策の過程で、食の流通が変化し、調理と食事の仕方が変わり、また、食品に対する化学物質の使用が増えた。これによって、ベトナムにおける食中毒や食品媒介感染症も、急速に多様で複雑なものになっている。この報告は、その様子を具体的に示している。

「ベトナムにおける食品安全分野の専門家育成について」

著者のファム・ゴック・カイは、前述の通り、タイビン医科大学の副学長であり、この報告でも言及されている専門家育成のため

のプログラムに関する保健省のワーキングの座長も務めている。

この報告は、2010 年に 10 月に行われた GLOCOL セミナー「ベトナムにおける食品安全衛生と専門家育成」における発表と基本的な内容は同じであるが、翻訳は、その後、ハノイ第一農業大学でファム・ゴック・カイ副学長が同じテーマで行った発表の草稿に基づいている。

この報告は先のカン局長の食品安全に関する現状報告と表裏一体の関係にあり、問題を解決するために不可欠な人材育成について報告したものである。また、大学による国際協力という視点から考えた場合、カン局長の報告が主として研究・実践面での協力を考える際の基本的な情報となるのに対し、カイ副学長の報告は教育面での協力にとって重要な情報となると考える。

「ベトナム北部における水問題と水質汚染——ヒ素汚染の問題を中心に」

著者のヴ・フォン・トゥックは、タイビン医科大学の講師で、ベトナムの農村部における健康環境をテーマとして研究を行ってきた専門家である。

この報告は、2010 年 10 月に行われた組織的な大学院教育改革プログラム「健康環境リスクマネジメント専門家育成」によって行われた第二回国際シンポジウム「食と環境の安全・安心に向けたリスクマネジメント」における発表原稿を翻訳したものである。

この報告で、焦点になっているヒ素は地下水に含まれているものであるが、ベトナムにおいては、近代化とともに工業用水や生活用水のための地下水のくみ上げが急速に増大している。ヒ素中毒の危険は、単に水を直接飲んだり、生活用水として用いたりすることだけにあるのではなく、例えば、ヒ素の含まれた水を排水することによって環境が汚染され、別の食品等に濃縮される危険性も考えられる。健康被害の有無も含めて、今後、ベトナムで研究が必要な対象である。

「海外研修『ベトナムの食と薬』報告」

この報告は、組織的な大学院教育改革推進プログラム「健康環境リスクマネジメント専門家育成」において行われた平成 22 年度海外研修「ベトナムの食と薬」について報告したものである。

この研修は、「国際的かつ学際的視点に立った情報収集・解析能力およびリスクコミュニケーション能力の養成を目的とする」ものであり、タイ、中国、ベトナムの3ヶ国でそれぞれプログラムが生まれ、2010年8月から9月にかけて順次実施された。このうち、GLOCOLは、中国とベトナムのプログラム企画の主体となった。

この研修では、同一課題について異なる分野の専門性を持つ学生が交流し連携することを目指しており、薬学や保健分野の学生だけでなく、人間科学など文系の学生も参加して行われた点に特色がある。

栄養と食の安全の問題は、その問題発見と問題解決の両方において、文系と理系の学問分野の協働が不可欠な領域である。このブックレットが、ベトナムという一つの場において、学問分野間の協働と国際協力を考える際の端緒になればと考える。